

## 第21突撃隊・第132震洋隊(土佐清水)

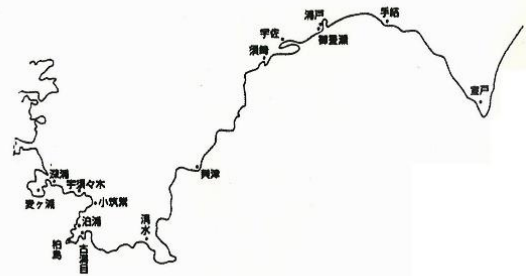
### 基地の特攻艇格納壕跡

戦時中、高知県内には2つの突撃隊があった。第21突撃隊(嵐部隊)と第23突撃隊である。第21突撃隊は、宿毛・宇須々木に本部を置き、麦ヶ浦・小筑紫・泊浦・柏島・古満目・土佐清水に基地を造営し、非常時に備えた。第23突撃隊は、須崎及び浦戸に本部を置き、興津・野見・須崎・宇佐・浦戸・御昼瀬・手結・室戸に基地を造営し、同じく非常時に備えた。いずれの突撃隊も呉鎮守府の第八特攻隊の傘下にあった。

各基地には壕が掘られ、それぞれ回天隊、震洋隊、魚雷艇隊等が配置・格納された。以下、右の表・図を参照いただきたい。いずれも上杉利則『土佐清水にも特攻基地があった 戦後59年洞窟の証言』(土佐清水市教育研究所、2004年)から引用掲載した。

第21突撃隊 (本部 宇須々木)	麦ヶ浦 小筑紫 泊浦 柏島 古満目 清水	第11回天隊 第17海龍隊(未配備) 第142震洋隊 第134震洋隊 第21魚雷艇隊 第132震洋隊
第23突撃隊 (本部 須崎に浦戸)	興津 野見 須崎 宇佐 浦戸 御昼瀬 手結 室戸	震洋隊(未配備) 第49震洋隊 第4回天隊、魚雷艇隊 第50震洋隊 第6、第7回天隊、魚雷艇隊 第127震洋隊 第128震洋隊 蛟龍隊(未配備)
第102突撃隊 (本部 深浦)	深浦	蛟龍隊

四国南西部、南部に展開した各特攻部隊



四国南岸の海軍特攻基地位置図

#### (1)第132震洋隊(土佐清水)基地の規模と役割

終戦間際、米軍は昭和20年6月に沖縄に上陸した。その次の上陸地は、一般的には鹿児島と思われていたが、日本軍は米軍が陽動作戦(目的と違う行動をして敵の注意をそらす作戦)により、南四国に上陸する可能性を警戒した。そこで第132震洋隊(土佐清水基地)をはじめ高知県内各地に特攻基地を設けた。

「震洋」とは、長さ約5~6m、幅2m、先端に250kgの弾薬を積載した1~2人乗りの耐水性ベニアで製造された草色のボートである。ゼロ戦のように敵船に空中から激突するのではなく、敵戦艦が錨を下ろして停泊してから、水上より激突する特攻隊である。第132震洋隊に特攻隊員は、土浦海軍航空隊甲飛予科練14期生がその任にあたり、補充搭乗員を含め48名であった。その他、本部員・整備員を含めると基地には171名の隊員が所属した。初めは隊員の宿舎として清水小学校を充てたが、空襲が多くなり、隊員は民家に分宿することになった。隊本部は、越八幡宮近くの松下繁氏邸に置き、渡辺国雄部隊長(第一艇隊長兼任)・増田六郎第二艇隊長・管頭重喜第三

艇隊長の三士官はここに宿泊した。その他、搭乗員は小江町周辺に三班に分かれて民泊した。隊の全滅を警戒した措置であった。

## (2)この格納壕はいつ？だれが？掘ったのか

基地が開所されたのは、昭和 20 年(1945)6 月下旬のことであった。元特攻隊員・都築庄司(つづきしょうじ)氏は、中年の応招兵で構成される基地隊員 70 人が交代して格納壕の掘削をおこなったと証言している。

同年 5 月上旬頃に、基地開所前に先遣隊として呉鎮守府により基地隊員が派遣され、掘削したと思われる。朝鮮人の徴用等も市内各地の戦争遺跡から風聞される。例えば、足摺岬の探信所建設や大浜の露天掘りトンネル掘削は、朝鮮人の徴用でつくられたとの証言があり、その可能性はゼロではない。土佐清水基地の格納壕掘削の危険な箇所について朝鮮人が徴用された可能性はある。大月町柏島に通じる軍用道路、旧大正町津賀ダム工事等の危険な工事に朝鮮人が徴用されたことが知られている。

全体として 20 か所掘削をおこなったが、崩落によって 15 か所のみが原形を留めているが、水分が多く、所々落盤も見られ、大変に危険である。掘削のときに落盤事故も発生したようであるが、詳細は不明である。



↑五型震洋艇



↑第 132 震洋隊・残存格納壕

## (3)まとめ

今年春、岩手県の高教員の方から、この震洋特攻艇格納壕のことについて、市史編さん室に電話が入った。震洋特攻艇の格納壕がこのように一塊で多く残存している場所は大変めずらしいという。高校の平和学習の資料として震洋のことは活用しているようである。全国的に貴重な戦争史跡であり、だからこそ、今後その保存と活用、平和学習に生かしていくことが重要である。

来月、12 日午後より土佐清水市へき地複式教育研究会東部地区高学年集合学習として「戦争遺跡のフィールドワーク及び平和学習会」が開催される。足摺岬小・幡陽小・下ノ加江小の 5~6 年生児童 29 名が、当日は震洋特攻艇格納壕及び越基地のフィールドワークと、平和学習を実施する。市史編さん室が講話を担当する。地元の戦争遺跡を通じて、戦争の実相と真実の歴史を学習できる場にしていきたいと考えている。平和学習の実物教材は、市域にたくさん残っている。これを使わない手はない。